

発行所

札幌市北区北15条西7丁目  
北大医学部同窓会  
TEL&FAX(011)706-5007  
E-mail: furate@med.hokudai.ac.jp  
https://hokudai-med-dousou.com

編集人 矢部 一郎  
発行人 浅香 正博

# 北大医学部同窓会新聞



## CONTENTS

- (1) ・新しい年を迎えて……………浅香 正博  
・年頭のご挨拶……………畠山 鎮次
- (2) ・教授就任のご挨拶……………向野 雅彦 山田 崇弘  
・計報名誉教授 松田 英彦先生(37期)を偲んで……………石田 晋 竹内 勉  
・計報名誉教授 金田 清志先生(38期)を偲んで……………岩崎 倫政
- (3) ・計報名誉教授 小林 邦彦先生(42期)を偲んで……………真部 淳  
・秋の褒章、叙勲……………三浪 明男 長瀬 清
- (4) ・秋の褒章、叙勲……………稲川 昭  
・ズームアップ⑩……………南須原康行  
・ズームアップ⑪……………中丸 裕爾
- (5) ・エルムの仲間達へ⑫……………澤 洋文
- (6) ・医学部生の研究活動紹介……………黒田 花音 近藤 隆 秦 玉登  
・医学部医学科公認サークル紹介シリーズ 第10回 剣道部……………三浦健太郎
- (7) 水泳部……………岸本 佳子  
・理事会・評議員会報告  
・総会、新入会員歓迎会のお知らせ  
・告知板
- (8) ・事務局からお知らせ  
・フラテ109号発行のお知らせ  
・フラテ祭2022 開催報告
- (9) ・新刊書紹介
- (10) ・北海道医学会からお知らせ  
・過年度会費が2年を超える会費未納者と会員名簿の発送について  
・令和4年度 同窓会員名簿について  
・百年記念館の利用について  
・ご逝去者・一面の写真説明・編集後記

「AM 8:39」

医学科3年 <sup>にし むら</sup>西村 <sup>しゅん</sup>峻(第102期)



## 新しい年を迎えて

北海道大学  
医学部同窓会会長

<sup>あさ か</sup>浅香 <sup>まさ ひろ</sup>正博(48期)

新年おめでとうございます。

2022年2月24日に開始されたロシアによるウクライナへの軍事侵攻が世界中を驚かせました。このようなことは21世紀には起こりえない出来事と誰もが考えていたと思われませんが、実際に起こったことで、時計の針が100年近く逆戻りをしたかのような印象を受けました。ロシアのプーチン大統領は数日で首都キーウを陥落させ、短期間で戦争を終わらせる計画を立てていたようですが、ウクライナの抵抗が予想以上に頑強で、ロシア軍の進行のスピードが鈍り始めました。秋口には、戦況が一変し、ウクライナ軍が攻勢を示すようになってきました。気がかりなのは追い詰められたプーチン大統領が戦況を変えるために戦術核を使用するかどうかということです。遠い地域での戦争がわが国にも影響を及ぼす可能性がでてきております。一日も早く、この戦争が収束に向かうことを心から願っております。

医学部創立100周年行事が終了し、北大医学部は新しい方向を目指して動き出しました。2021年に最新の同窓会誌が送られてきましたが、それを見ると80期までは各期便りがきちんと記載さ

れておりますが、81期以降は94期を除いて全く記載されておられません。このことは若い世代と同窓会との関わりが希薄であることが一因と考えられますので、同窓会としても改善策を考えることになりました。従来、医学部を卒業してから同窓会に入ってもらうことになっていましたが、2014年からは医学部入学と同時に同窓会に入会してもらおうよう変更したのです。学生時代から同窓会活動に接してくれることにより、卒業後もスムーズに同窓会とのつながりが維持できるものと考えております。実際に、医学部の学生にも同窓会から様々な援助ができるようになりました。同窓会誌は2年ごとに発刊され、同期の方々の現状を知ることのできる貴重なツールと思われれます。私から81期以降の同窓会の評議員の方々へお願いしたいことは、同期の情報をできる限り集め、その情報を共有することにより皆さん方のつながりをより強固なものにしていただきたいということです。

2023年の新年を迎えるにあたり、北大医学部同窓会会員の皆様方のご健康並びにご多幸を心からお祈りし、年頭のご挨拶といたします。



## 年頭のご挨拶

医学部長・医学研究院長

<sup>はたけやま</sup>畠山 <sup>しげ つぐ</sup>鎮次(66期)

明けましておめでとうございます。同窓会員の皆様におかれましては、新年をつつがなくお迎えのこと、お慶び申し上げます。

この数年間、新型コロナウイルス感染症の多大なる影響を受け、北海道大学医学部もこれまでに経験のない対応を進めてまいりました。しかしながら、本年度の後期からほぼ通常の授業形態に戻りつつあり、実習に関しても、コロナ禍では出席人数を半減して複数回実施するなどの対応で進めてきましたが、人数制限をしないかたちで進めることがほぼ可能になっております。これまで、学生のみならず教職員にも、たいへんご負担をおかけしたと思います。

2026年の北海道大学創基150年に向け、「比類なき大学」を目指して、企画運営委員会が発足し、150周年事業の「コンセプト」や具体的な事業案が構想されております。今後3年、寶金総長の卓越した推進力を大いに期待するとともに、医学部・医学研究院としても最大限の努力と支援をする所存でございます。

2022年4月から北海道大学としての第4期中期計画・中期目標が決まり、医学研究院・医学院としても関連する項目に協力していくことが求められておりま

す。その一つの基準である外部資金の獲得において、医学研究院としても北大病院と結束しながら、医学・医療の研究シーズを実装化することで、財源確保に貢献していく必要があると考えております。

日本医学教育評価機構(JACME)の医学分野別認証評価の受審は、国際的見地から本学医学部医学科の教育の質が調査されるものであります。医学分野別認証評価の受審に関して、約3年前からワーキンググループを立ち上げ、FD等を複数回開催しました。2021年11月に1週間にもわたるJACMEの評価者による受審がありました。2022年の8月にJACMEからの報告があり、北海道大学医学部医学科は2022年10月からの7年間の認定を受けました。関係されました教授会メンバー、医学教育国際交流推進センター、そして教務関係の事務職員に感謝を述べたいと思います。

北大医学部において、日頃から同窓会の皆様からも様々な形で多大なるご支援をいただいております。この場をお借りして、同窓会にお礼を申し上げたいと思います。

新年が皆様にとりましてすばらしい年となりますことをお祈り申し上げます。年頭のご挨拶といたします。

# 教授就任のご挨拶



北海道大学病院  
リハビリテーション科  
教授  
むかひの まさ ひこ  
**向野 雅彦**  
(会員2)

この度、令和4年8月1日付で北海道大学病院リハビリテーション科教授に着任いたしました向野雅彦と申します。北海道大学病院リハビリテーション科は登別分院の流れを汲んで1995年に創立され、眞野行生先生、生駒一憲先生のご元で発展し、現在に至っております。日本のリハビリテーション医学の分野において重要な役割を担ってきた教室を引き継がせていただくこととなり、

大変光栄に感じております。

私は福岡の出身で、地元の修猷館高校を出た後九州大学医学部に進みました。在学中に脊髄損傷の患者さんのリハビリテーションの現場を拝見し、リハビリテーションが患者に力を与える素晴らしいことに触れた一方で、二度と歩くことができない患者の悲嘆にも触れ、リハビリテーション医学をより高いレベルに押し上げて患者を救う助けをしたいと強く思い、リハビリテーション科を志しました。卒業後に慶應義塾大学のリハビリテーション医学教室に入局して臨床の経験を積みながら、同大学の生理学教室で脊髄の炎症と再生に関わる研究に取り組み、学位を取得し

ました。その後、慶應義塾大学月が瀬リハビリテーションセンターなどを経て、平成24年には旭川医科大学に異動し、リハビリテーション科の立ち上げに携わりました。平成26年からは愛知県藤田医科大学に移り、急性期、回復期の診療に取り組むとともに、さまざまな臨床研究、開発研究も行ってまいりました。臨床研究においては、動作分析や活動量分析など、リハビリテーション医学の発展の基礎となる客観的な臨床評価の開発と臨床導入、そのための機器開発にも取り組んでおります。また、患者の生活の評価を従来のADLの枠組みを超えてより包括的なものにするために、国際生活機能分類 (ICF)

を用いた生活機能評価の仕組みの構築と普及にも取り組んでまいりました。

リハビリテーション科には、超高齢化社会においてますます重要性を増す患者さんの"活動"の問題をサポートする診療科として重要な使命があります。日々の病院の診療を充実させ、地域医療に貢献していくとともに、研究、開発にも積極的に取り組み、国内外をリードするアクティブな教室を作りたいと思います。同窓会の諸先生方におかれましては、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



北海道大学病院  
臨床遺伝子診療部  
教授  
やまの たかひろ  
**山田 崇弘**  
(71期)

この度、2022年11月1日付で北海道大学病院臨床遺伝子診療部教授を拝命いたしました。北海道大学病院臨床遺伝子診療部は「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」(文部科学省、厚生労働省、経済産業省)等に基づいて2001年12月に設置された部署であります。本部署は初代部長 小林邦彦先生(小児科教授・現名誉教授)、二代部長 佐々木秀直先生(神経内科教授・現名

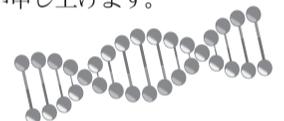
誉教授)、三代部長 矢部一郎先生(脳神経内科教授)と引き継がれており、これまでは全員が兼任で運営されて参りましたが、この度初めて専任の教授として着任いたしました。

私は1995年に本学を卒業し、産婦人科学教室に入局して大学や道内の関連施設を中心に臨床・研究・教育に取り組んでまいりました。産婦人科の研修の中で人類遺伝学を志すようになり、大学院では、北大小児科出身で当時の長崎大学の新川詔夫先生(原爆後障害医療研究施設教授)の人類遺伝学教室やカナダ・トロントのDr. Steve Scherer(トロント小児病院)が主宰する遺伝学教室において基礎研究を行いました。

帰国後は本学の産婦人科学教室に戻り、産科・周産期医学と生殖・周産期領域の臨床遺伝学の臨床・研究・教育を2017年春まで行いました。2017年からは領域横断的な臨床遺伝を行うために京都大学医学部附属病院遺伝子診療部・倫理支援部へ異動いたしました。ここでは全ての領域における臨床遺伝を行うだけでなく、遺伝情報の取り扱いに関わる倫理的な検討も行う機会を得ました。特に2015年に京都大学で始まった臨床におけるがんゲノムプロファイル検査に係る二次的所見の取り扱いに関する検討に携わる機会を得たことは私にとって非常に重要なことであります。また、京都大学では公衆衛生大

学院(大学院医学研究科社会健康医学系専攻)の教員も兼任し、認定遺伝カウンセラーの養成も行いました。

今回、母校に貢献する機会をいただきました。臨床遺伝と遺伝カウンセリングは既に臨床のみならず基礎研究においても欠くことができないものとなっております。本学の誇る総合力を活かしてゆくために臨床遺伝と遺伝カウンセリングの面から大いに貢献させていただきたく存じますのでご指導ご鞭撻いただけますようどうぞよろしくお願い申し上げます。



## 訃報 名誉教授 松田 英彦先生(37期)を偲んで

北海道大学大学院医学研究院  
眼科学教室 教授 いしだ すずむ  
**石田 晋**(会員2)  
医療法人社団  
竹内眼科医院 たけうち つとむ  
**竹内 勉**

御子息 松田 彰先生(67期)  
より御提供

名誉教授 松田英彦先生が、令和4年7月28日に逝去されました。

享年87歳でした。

先生は昭和36年3月北海道大学医学部を卒業、昭和37年同大学眼科学教室に入局(藤山英寿教授もと)、昭和43年9月学位取得、昭和45年9月アメリカ合衆国コロムビア大学に留学昭和47年帰国、昭和49年4月北海道大学医学部眼科学助教授、昭和53年8月同教室 第4代教授に就任されました。その後、教育、研究、診療に努め、平成12年3月定年退官、同

年北海道大学医学部名誉教授の称号を授与されました。

先生は電子顕微鏡を用いた形態学の専門家として優れた業績を多数残されました。

三叉神経切断による角膜上皮細胞、角膜神経の電顕的研究、角膜血管新生発現に関する電顕的研究、原田病および交感性眼炎におけるメラノサイトの電顕的研究、ベーチェット病眼にみられる微細構造上の変化について、眼血管内皮細胞のTubular bodyに関する研究等。

教授になられてからは、未熟児網膜

症の治療と予後、角膜ヘルペスに関する二、三の知見、眼科領域における腫瘍免疫、眼外傷と眼組織反応、ぶどう膜炎と免疫インターフェロン、眼における遅延型アレルギー反応、粘膜炎と炎症等の講演をされ、平成12年の退官時には第104回日本眼科学会総会で「遺伝子発現と眼の発生、生理、病理」と題して特別講演をされました。

臨床ではトラコーマから始まり、SMON、ぶどう膜炎、白内障手術、未熟児網膜症、糖尿病性網膜症、角膜移植、角膜熱形成等に造詣が深く、眼科学発展に寄与されました。

任期後半には教室員も増え、研究費の確保や研究補助員の確保と苦労されていたようです。

また医師派遣要請にも積極的にこたえておりました。

日本眼科学会では 日本眼科学会評

議委員 1979年～ 2001年、日本眼科学会理事 通算6期12年、日本眼科学会名誉会員 2001～の役職をされておりました。

1993年第97回日本眼科学会総会会長、2000年日本眼科学会賞、2003年日本眼科学会特別貢献賞を受賞しています。またこの間に日本眼科学会専門医制度の立ち上げにたずさわって今日の眼科専門医の確立にご尽力されました。

退官後は北海道医療大学病院、その後医療法人社団竹内眼科医院で永らく勤務医として活躍され多くの患者さんから慕われておりました。

水泳、日々の散歩を趣味に体調管理を万全になさっておりました。この度の訃報に驚いた次第です。

先生の長年にわたるご功績に敬意を表し、多大な貢献に感謝申し上げます。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



## 訃報 名誉教授 金田 清志先生(38期)を偲んで

北海道大学大学院  
医学研究院整形外科学教室 教授 いわさき のりまさ  
**岩崎 倫政**(会員2)

名誉教授 金田清志先生(38期)は、令和4年10月9日にご逝去されました。ここに故金田先生の生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は、昭和11年9月7日に福島県に

生まれ、昭和37年3月に北海道大学医学部を卒業されました。京都大学医学部附属病院での実施修練の後、北海道大学整形外科に入局され、副手、助手、講師、助教授を経て昭和61年8月に第4

代整形外科学講座教授にご就任されました。平成7年4月からは、北海道大学医学部附属病院登別分院院長を併任され、平成12年3月に北海道大学を定年にて退職されるまで整形外科学の診療・教育・研究に努められました。退職後は、平成12年4月より北海道美唄労災病院(現北海道せき損センター)の院長として勤められ、地域医療や脊椎脊髄損傷の治療に尽力されました。特に、重篤な四肢麻痺をきたす脊髄損傷患者を治療

するためのセンターを整備し、国内トップクラスの脊損治療機関に育て上げました。

診療と研究においては、脊椎のバイオメカニクス研究を基盤とした脊椎再建手術用instrument「Kaneda device」の開発と臨床応用に取り組み、脊椎脊髄領域の手術治療の発展に大きく貢献されました。Kaneda deviceは、1989年にアメリカ食品医薬品局(FDA)の承認を受けた後、欧米諸国を中心に世界中

で使用され、海外にて高い評価を得ました。私が病棟担当医の頃は、このdeviceを用いた手術を見学するため教科書を執筆しているような海外の著名な脊椎外科医が数多く来院し、また先生ご自身も海外からの手術要請に応じていました。また、金田先生は整形外科

学のグローバル化を目指し、国際学会において精力的に活動され、脊椎外科学の最高峰の学術雑誌のシニアエディターを務めるなど、国際的リーダーシップを遺憾なく発揮されました。これらの功績が海外でも認められ、整形外科関連の主要な国際学会において6度の

受賞をされています。

金田先生は、ご自身の活動を通じて教室に“originalityのある仕事をし、それを世界に向けて発信する”という「文化」を根付かせてくれました。先生のご指導を受けてきた我々は、このことを常に心に留め、先生が築き上げられた教

室をさらに発展させていく所存であります。

ここに謹んで先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



### 訃報 名誉教授 小林 邦彦先生(42期)を偲んで

北海道大学大学院  
医学研究院 小児科学教室 教授

まなべ あつし  
真部 淳(61期)

北大名誉教授の小林邦彦先生が、令和4年10月23日にご逝去されました。享年81歳でした。小林先生は昭和35年に札幌北高校を卒業し、昭和41年に北海道大学医学部医学科を卒業しました。在学中は全学水泳部と医学部スキー部を掛け持ちされ、よく体を鍛えられたそうです。卒業後1年間のインターンを経て、昭和42年に北海道大学医学研究科(小児科学)に入学され、昭和46年に医学博士の学位を授与されました。

昭和46年-48年にはベルギーのルーバン大学実験医学研究所、昭和50年-52年には米国のアラバマ大学実験内分泌研究所に留学。昭和54年に山口大学小児科に移られ、講師、後に助教授になりました。ついで平成元年12月に北海道大学医学部臨床検査医学講座の教授になりました。そして平成6年には北海道大学医学部小児科学講座の第5代の教授に就任され、平成16年に定年退職されるまで職務を全うされました。

小林先生の専門領域は小児の免疫学ですが、中でも分泌型IgAの精製、白血球接着不全症、補体活性、自己免疫性腸症などでその分野をリードされました。小林先生の北大教授時代の業績は、欧文論文492編、和文論文1,111編に上ります。もちろん、小児科には多くの領域があり、ご専門である免疫学に限定されるものではありませんが、教室全体でとても活発に研究が展開されていたことが窺えます。

小林先生は北大退官後は、札幌北楡病院で顧問としてアレルギー外来を担当されました。また入院患者のカンファレンスで問題点を指摘し、多数の論文の校閲をされました。同院での小林邦彦先生の業績は、15年間に欧文55編、

和文10編に上ります(多くは同院小児科の小林良二先生(元北大小児科講師)との共著です)。

小林先生はフランクな人柄の反面、厳しくもあり、附属病院の副病院長時代には、司会を務められた病棟医長会議で査定率の高かった第一外科と自分の科である小児科を糾弾されたとのこと。私自身は残念ながら小林先生とご一緒に仕事をすることはありませんでしたが、お会いするたびに私の拙い教室運営に対して優しくアドバイスをいただきました。

以上、先生の長年にわたるご功績に敬意を表し、多大なる貢献に感謝申し上げます。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

## 秋の褒章、叙勲

### 【瑞宝中綬章受章】 保健衛生功労・教育研究功労



北海道せき損センター  
院長、  
北海道大学名誉教授

みなみ あきお  
三浪 明男  
(48期)

「叙勲に際して」

このたびは、はからずも叙勲(瑞宝中綬章)の荣誉にあずかりました。本章は私個人が頂戴したのではなく、北大医学部同窓会そして整形外科教室の先輩・同輩そして後輩の皆様のご支援を得て代表して受章したものです。多くの皆様に心より感謝申し上げます。

私は昭和22年に5人兄弟の一番下の次男として生まれました。昭和41年に札幌北高を卒業し、北大医学進学課程に入学し、昭和47年に医学部を卒業しました。大学卒業後、兄(三浪三千男40期)から整形外科の魅力についてインプットされていたので、迷わず整形外科医局に入局しました。当時の北大整形外科は部位別に4つの班(脊椎、上肢、下肢、股関節)に分かれていましたが、上肢班のチーフでした石井清一先生(札幌医大教授、37期)の人間性に惹かれて上肢班を選択しました。上肢班には荻野利彦先生(山形大学教授 47期)はじめ非常に優秀な先生がたくさんおられ大変活気のある班でした。

この間、石井先生の勧めもあり、当時の北大医学部附属癌研究施設(現 北大遺伝子病制御研究所=遺制研)病理部門での基礎研究(腫瘍免疫における suppressor T cellの役割)を3年半にわた

り行いました。癌研病理には小林博教授(28期)、細川真澄男先生(遺制研教授40期)や武市紀年先生(遺制研教授42期)など錚々たる先生方がおられ、腫瘍免疫を世界的に牽引するという気概に満ちており、私も誇らしく研究に没頭しました。癌研病理では基礎研究の醍醐味と英文論文執筆の重要性を学びました。

また、昭和57年から米国Mayo Clinic整形外科に留学し、手の外科の生体力学的基礎研究と手関節外科の臨床研究についての研鑽を積み重ねました。非常に有益な留学生活を送ることができ、その後の手の外科領域での私の臨床指針を与えてくれたような気がします。

平成12年に金田清志教授(38期)の後任として北大大学院医学研究科整形外科分野教授に就任してから、加藤

副支部長、3年支部長、11年北海道医師会副会長、19年7月から令和3年7月31日任を終えるまで30年余にわたって医師会活動に携わってきました。この間、日本医師会の委員会委員(主に医療政策)、理事として役割を果たしてきました。札幌市医師会では当時医療廃棄物処理による、特に針刺し事故での肝炎罹患問題、北海道医師会では、医師不足による深刻な状況対応に迫られました。特に医師不足では、多くの、特に都会から離れた僻地では大変でした。医師の供給を大学の医局に頼っていたから、入局拒否など学園紛争時医師の供給が全く途絶え大変な思いをし

ました。医師不足は、田中角栄総理の実力発揮、1県1医大政策で徐々に解消されました。しかし、当時医師不足のため医師名義の借り貸しが行われ、厚労省の調査で医師不足を摘発され、医師、医療機関の保険資格取り消しが行われ、病院の倒産、医師の自殺事件等深刻な状況でした。医師会としてこのような事件に対して、改革なしの厚労省の行き過ぎた現場対応に厳しく意見を申し上げてきました。加えて、北海道の著名ながん罹患率、死亡数改善のためがん対策に力を注ぎました。

今後、会員の皆様方、強いご支援をお願い致します。

### 【旭日小綬章受章】 保健衛生功労



元北海道医師会会長

ながせ きよし  
長瀬 清  
(40期)

私はこの度令和4年度秋期叙勲において、図らずも旭日小綬章を授与されました。

昭和40年、医師となり、北海道大学大学院を昭和44年3月に卒業。4月に助手として採用され、北海道大学医学部

付属病院第3内科で学生の教育、指導及び研究を助手、次いで講師として昭和58年まで務めました。この間に始まった安保闘争がもととなり、学園紛争に発展、大学、大学教育や研究のあり方が問われ、機能不全状態になりました。そのような状況から、昭和58年2月に大学を退職、翌3月から札幌の中心街で内科医院を開業、院長として新しい道に入り、同時に、医師会の所属を北海道大学医師会から札幌市医師会になりました。

札幌市医師会は、区を支部とし中央区のみ東西2支部制をとっています。私は中央区東支部に属し、平成元年支部

ました。医師不足は、田中角栄総理の実力発揮、1県1医大政策で徐々に解消されました。しかし、当時医師不足のため医師名義の借り貸しが行われ、厚労省の調査で医師不足を摘発され、医師、医療機関の保険資格取り消しが行われ、病院の倒産、医師の自殺事件等深刻な状況でした。医師会としてこのような事件に対して、改革なしの厚労省の行き過ぎた現場対応に厳しく意見を申し上げてきました。加えて、北海道の著名ながん罹患率、死亡数改善のためがん対策に力を注ぎました。

【旭日双光章受章】  
保健衛生功労



元室蘭市医師会会長  
いな がわ あきら  
**稲川 昭**  
(49期)

「旭日双光章を受章して」

今回の受章は公益社団法人室蘭市医師会（室蘭市、登別市）会長としての活動が主たる評価とっております。支えていただいた医師会の諸先輩・後輩に深く感謝いたしております。

大学に入学した時代は70年安保、ベトナム戦争、東大紛争など否が応でも社会問題に目を向けなければならないような時代でした。半年遅れの卒業後は北大小児科学教室に入局し、新生児学と周産期学を中心に学ばせていただきました。昭和59年室蘭・日鋼記念病院にNICU開設を目的に赴任いたしました。その後平成2年に室蘭市で小児科を開業し、平成9年より室蘭市医師会の理事に推挙され、医師会活動に足を踏み入れました。会長を5期9年3か月務めさせて頂き、救急医療体制の役割分担・補助金獲得、中学生の公費でのピロリ菌検査・除菌、未来のバイスタンダー

である高校生を対象にミニアンCPRマネキンを利用し地元消防と連携した大規模な心肺蘇生講習会、小中学生の野球肘検診など勤務医や理事の協力のもと実施してきました。また地域包括ケアシステムの構築に欠かせない患者の医療・介護・福祉の情報ネットワークの構築を総務省から多額の補助金をいただき西胆振スワンネットとしてスタートさせることが出来ました。

北海道医師会関係では代議員を18年間、代議員会副議長を6年間務めさせて頂き、長瀬清前会長はじめとする執行部の皆様のご指導の下、医療行政との係わりについて学ばせていただき

ました。医師会活動はややもすると開業医中心の活動とみなされることが多いですが、地域医療現場では地元の行政と緊密な関係が構築されており、具体的な課題を解決する役割が大きいと思います。

日本医師会も述べられておりますように医療資源は大切な社会的共通資本であることは疑いありません。今後の医療提供体制はコロナ禍を経験し大きく変わることになるとは思われますがより良い体制が構築されていくことを願っております。

ズームアップ②0 医師の働き方改革について：  
後編 医師の働き方改革の概要と課題

な す はら やす ゆき  
南須原 康行 (64期)



北大病院副病院長（医療安全担当）の南須原（64期）です。前号に続いて今号では医師の働き方改革の概要と課題を紹介いたします。2024年度から医師の時間外労働規制が施行され、医師の時間外労働の上限は年960時間（月100時間未満（例外あり）、休日労働を含む）となります。対象となるのは労働者としての医師ですので、管理者である病院長（診療所の院長）は対象外です。また、北大病院の教員（助教以上）については、裁量労働制であり一般則が適用されるため上限は年720時間となり、健康確保措置や特例水準の適用はありません。特例水準というのは図に示す通りです。基本はA水準で上記の年960時間が時間外労働の上限になります。現在の医療体制、特に医師の偏在（診療科、地域）が改善されない中での施行は医療の質・安全の低下につながるということで、連携BおよびB水準が設けられます。連携B水準というのは本務先と兼業先での合計時間外労働の上限が年1860時間となります（個々の医療機関における上限は年960時間以下）。これは、主に兼業として地域医療を担っている大学病院の医師への適用が想定されています。B水準というのは本務先での時間外労働上限が年1860時間となります。これは、救急や高度な専門性を有する領域、また、僻地の中核的な医療機関などへの適用が想定されています。これらの特例水準についても2035年度末には解消される予定です。つまり、これからの約10年間で地域における医療体制の抜本的な見直しを行

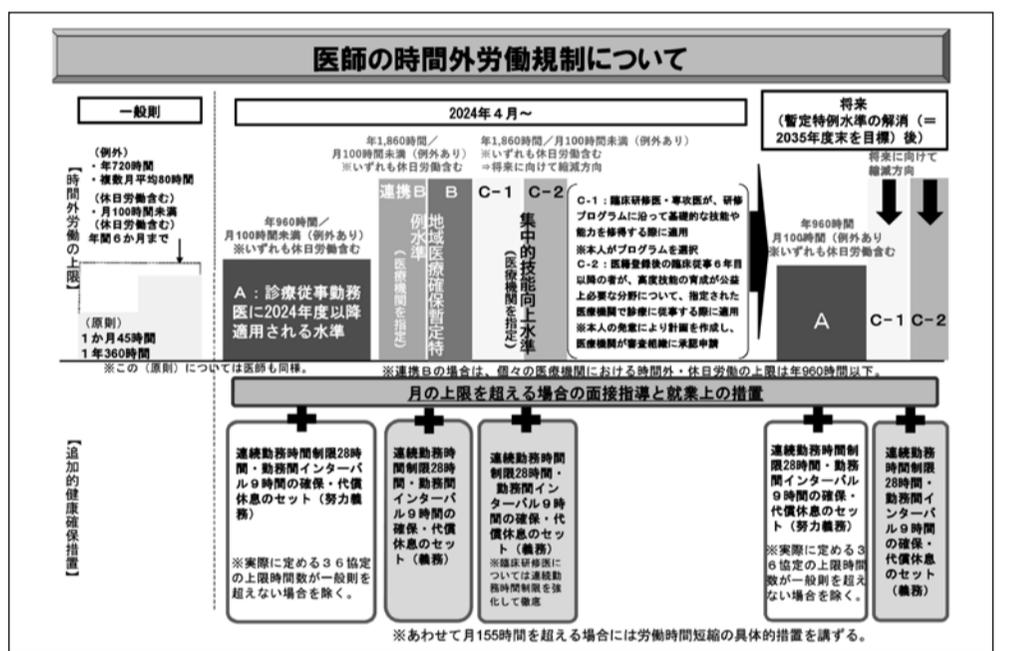
う必要があるということですので。さらに、臨床研修医・専攻医が技能などを修得する際に適用されるC-1水準、臨床従事6年目以降の者が高度技能の育成のために適用されるC-2水準が設定されています。特例水準が適用された場合には、月の上限を超える場合の面接指導と就業上の措置が義務となります（A水準は努力義務）。具体的には、連続勤務制限28時間、勤務間インターバル9時間の確保、代償休息の付与です。以上が、制度の概要になります。

制度の実施に当たっては、出退勤のデジタル管理の義務化、病院内に滞在している間の業務と自己研鑽の区分け、医師の業務負担軽減のためのタスクシェア（シフト）の推進など多くの課題がありますが、紙面の都合上、多くの同窓会員の先生方が最も関心があると思われる大学病院からの医師派遣について記します。宿日直許可を取得している医療機関における宿日直は労働時間とはみなされません（診療や処置を行った場合には実労働時間のみが時間外労働となります）ので、従来同様に大学病院からの医師派遣は可能です（ただし、一人の医師が同一医療機関で行える宿日直は週一回、日直は月一回が上限）。一方で、宿日直許可を得ていない（得ることが出来ない）医療機関での宿日直は滞在時間全てが

労働時間となります。これは、宿日直を担う医師からは、時間外労働の上限より、宿日直回数が制限されることとなります。さらに、連携B水準の場合、勤務間インターバル9時間が必要ですので、宿直の翌日に本務先である大学病院での勤務が出来ないこととなります。そうすると、大学病院としても診療に多大な影響があるので兼業を許可できないということが起こります。このことは、直ちに地域医療の崩壊につながりますので、早急な対応が必要になります。救急当番であっても業務内容によっては宿日直許可が得られるケース、準夜帯と深夜帯で分けることにより認められるケース、さらには地域性に配慮した柔軟な対応もあるようですので、宿日直許可の取得を行っていない医療

機関におかれましては、早急に検討することをお勧めします。また、夜間急病センターへの大学病院からの医師派遣も制限される可能性が高いと思います。したがって、クリニックの先生方におかれましては、当番回数が増えるかもしれません。

北大病院としても医師会、行政および札幌医大、旭川医大とも情報交換を行いながら、医療の質・安全への影響を出来るだけ少なくしての制度実施に向けてスピード感をもって準備・対応を進めております。会員の皆様方におかれましては、ご理解とご協力をお願いいたします。



ズームアップ②1 北海道大学病院アレルギーセンター開設

北海道大学病院 アレルギーセンター・センター長

なか まる ゆう じ  
中丸 裕爾 (66期)



令和4年4月1日に北海道大学病院アレルギーセンターが開設されました。アレルギーセンター開設の経緯と、今後の目標についてお話しさせていただきます。

アレルギー疾患の増加と治療法の変化  
近年、喘息、アレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎、アトピー性皮膚炎、食物アレルギーなどのいわゆるアレルギー疾患が増加してきております。最近の統計では、国民の半数以上の方が

何らかのアレルギー疾患に罹患されています。このように患者数が多いアレルギー疾患ですが、誤った情報に流され民間療法に頼る患者も多く、最も効果が期待できる標準治療が浸透していません。また、アレルギー疾患は複

数の疾患に同時に罹患する場合があります。近年開発が著しい各種生物学的製剤は、複数臓器に適応があり、診療科の垣根を越えて臓器横断的に診療する必要性が高まっております。

法律の制定

このような現状を背景に「アレルギー疾患対策基本法」(2014年)「アレルギー疾患対策の推進に関する基本的な指針」(2017年)「免疫アレルギー疾患研究10か年戦略」(2019年)などが制定されました。実際に運用する機関として、都道府県ごとに「アレルギー疾患医療拠点病院」が定められ、①難治性アレルギー疾患の診断治療②患者や地域住民に対する情報提供や相談対応③アレルギー疾患を治療できる人材の育成④研究などを行うことが、求められています。北海道においては、令和4年2月28日に北大病院がこの拠点病院に指定されました。

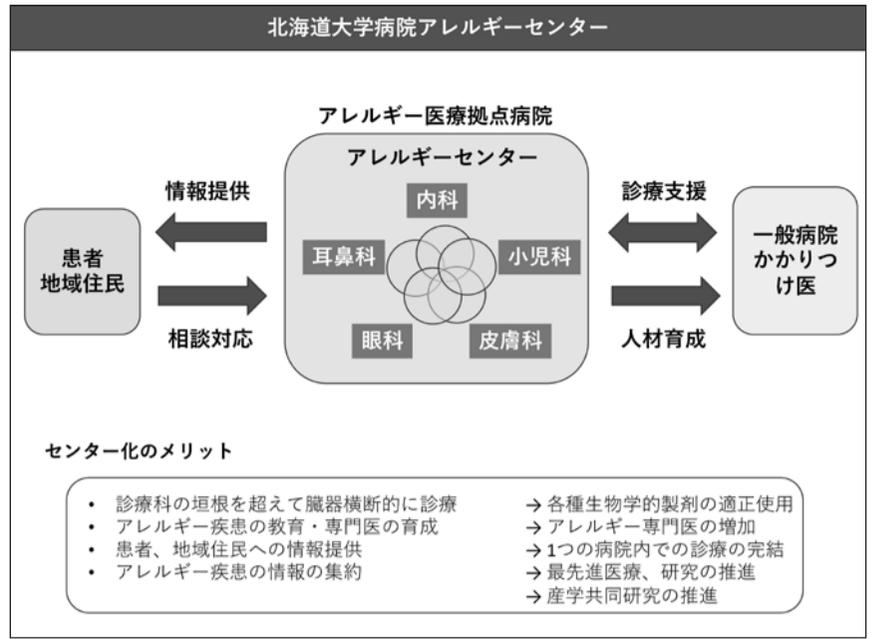
専門医研修組織の必要性

さらに、アレルギー診療を担う専門医の育成法も大きく変更される予定です。今まではそれぞれの医師が所属する診療科で研修すれば、アレルギー学会専門医と認められていたのですが、新専門医制度では、全科のアレルギー疾患を研修することが求められます。この新専門医制度に合わせて、研修を担当する組織が必要となります。(今年4月施行予定でしたが、直前で延期になってしまいました)

これらの役割を果たす組織として北海道大学病院にアレルギーセンターが設置されました。アレルギーセンターには、内科、皮膚科、眼科、小児科、耳鼻咽喉科の5科が含まれ、各領域のアレルギー疾患を治療すると共に、併存するアレルギー疾患やどの科に属するか不明の疾患を相談しながら診断、治療、管理をしていきます。(図)

アレルギーセンターのミッション

具体的な施策としては、以下の様なものを考えています。難治性アレルギー疾患の診断と治療に関しては、各科アレルギー専門医が集まりカンファレンスを行うことで患者の情報共有や治療にあたります。また、道央、道南、道北、オホーツク、十勝の各医療圏に「北海道アレルギー疾患協力病院」が制定されました。これらの病院と連携し、全道のアレルギー患者さんを治療していく予定です。患者への情報提供では、市民公開講座やアレルギー情報サイトでの周知を考えております。市民公開講座はコロナ禍のここ数年開催できないうございましたが、日本アレルギー協会北海道支部の主幹にてアレルギーセンターおよび北海道医療大学の先生方のご協力で本年4月9日にハイブリッド



開催いたしました。また、北海道大学病院アレルギーセンターのホームページにて、アレルギー疾患についてのポータルサイトや、一般の患者さん向けの相談窓口のサイトを紹介しております。医療者の育成では、前述の専門医研修のほかに、日本アレルギー学会北海道地方部会を10月に開催予定です。この学会では、専攻医の先生の研修だけでなく、道内のアレルギー研究を進める良い機会になると考えております。研

究では全国規模での疫学研究を担当します。また、センターに所属する科で協力し、疾患のフェノタイプやバイオマーカーを探索できれば良いと考えております。

以上のように、私たちアレルギーセンターのスタッフ一同、北海道アレルギー治療の均てん化を目指し貢献して行きたいと考えております。

エルムの仲間達へ⑫ 人獣共通感染症とOne World, One Healthについて

北海道大学人獣共通感染症国際共同研究所 分子病態・診断部門 One Health Research Center

澤 洋文(62期)



いつも大変お世話になっております。62期の澤と申します。同窓会の皆様方におかれましては平素より色々とお世話になりまして誠に有難う御座います。

私は北海道大学医学部医学科卒業後に循環器内科に入局し、入局と同時に大学院医学研究科内科系専攻博士課程に入学致しました。北大病院で病棟医をしておりました際に、循環器内科教授で御座いました安田 寿一先生に御紹介して頂きまして、当時の第二病理学教室の長嶋 和郎教授の下で研究をさせて頂く機会を与えて頂きました。2年間第二病理学教室で研究をさせて頂き、長嶋先生、安田先生の御指導の下で内科系専攻博士を修了致しました。その後、市立札幌病院循環器内科で1年間勤務後に、米国St. LouisのWashington University (ワシントン大学) 医学部にPost-Doctoral Fellowとして約3年間研究をさせて頂き、北大医学部循環器内科に戻って参りました。その後、再び長嶋教授の下で、ウイルス性感染症の研究に携わらせて頂く機会を与えて頂きました。2005年4月には、北海道大学に新設されました人獣共通感染症リサーチセンターで分子病態・診断部門の教授として人獣共通感染症の研究を開始して、現在に至っております。2018年に佐々木 秀直教授が主催されました第59回日本神経学会におきまして、Current findings on acute encephalitis via flavivirus infection: A form of zoonosisというsessionをさせて頂きました際に、

現在、北大医学部同窓会新聞編集委員長を務められておられます矢部 一郎教授に御世話になった御縁で、今回「エルムの仲間たちへ」へ御寄稿させて頂く機会を与えて頂きましたことに深謝いたします。

人獣共通感染症は人と動物の間に感染環を有する感染症で、自然界の野生動物に寄生し、被害を及ぼさずに共存してきた微生物が、家畜・家禽・人に侵入・伝播することにより生じる感染症の総称です。感染性微生物の内、約2/3が、また新興感染症の病原体の内、約3/4が人獣共通感染症病原体と考えられております。昨今、COVID-19等の人獣共通感染症が新興・再興感染症として社会で流行する原因としては、産業の振興、都市化、農業の強化、森林伐採等により野生動物と家畜、人の接触の機会が増加したこと、及び地球全体の気候の変化、人々の旅行、移動の増加、動物由来の食物の摂食の増加により、感染症伝播の機会が増加したことが考えられております。

人獣共通感染症の病原体は上述致しました様に、野生動物に由来しておりますので、根絶することは不可能です。人獣共通感染症を克服するためには、人獣共通感染症の発生予測と流行防止によって克服できます。新興・再興及び未知の人獣共通感染症を克服するためには、医学、獣医学、薬学、農学と情報科学を基盤とする微生物学、免疫学、動物生態学、数理生物学と危機管

理学、さらに心理学、法学、経済学等を融合させた新分野を創成し、先回り戦略を展開することが必要となってきます。

また、2004年9月に米国ロックフェラー大学で開催された野生動物保護学会において「ヒトと動物の間の病気の動向」に焦点を当てたシンポジウムが開催され、One World, One Health(世界は一つ、健康も一つ)という概念が提唱され、人および飼育動物(伴侶動物、産業動物、展示動物)の健康、野生動物を含む生態系の健全性を達成するための12項目から成るManhattan Principlesが採択されました。さらに2012年にはBarbara Natterson-Horowitz博士とKathryn Bowers氏が出版した本でZoobiquity(汎動物学)という学問を提唱し、人と動物の病気の共通性から、医学・獣医学の連携は双方の健康の向上に繋がるという概念を提示致しました。

北海道大学では北海道大学大学院獣医学院・国際感染症学院が中心となって推進する「One Healthフロンティア卓越大学院」が2018年度から開設されました。さらに本卓越大学院での活動を基にして、2021年3月にOne Health Research Center (OHRC) が北海道大学共同プロジェクト拠点として設置されました。OHRCは多様な人材が組織・研究室の壁を超えて集い、感染症出現リスクの予測、潜在的な化学物質汚染状況の摘発、医療・獣医療の進展を目指しております。また、OHRCでは長期的

視点でデータベース・試料バンクを構築するプロジェクトを組織的に推進し、One Healthの実現に必要な社会価値の創出に活用が期待される基盤情報・リソースとすることを目標としております。また、希少疾患、原因不明疾患に関する検査、高病原性病原体を用いた検査等、通常の検査で提供されない特殊検査をヒト及び動物に提供するシステムを構築しております。

OHRCが診断に関与しました人獣共通感染症の1例としては、室内飼育の犬において、1ヵ月以上にわたって間欠的な嘔吐、下痢、食欲低下が認められたため、糞便中の寄生虫卵を検査したところ、エキノコックスが疑われる多数の虫卵が認められました。そこで、OHRCおよび獣医学研究院においてPCR法を実施し、エキノコックス卵であることを確定致しました。エキノコックスに感染した犬には吸虫駆除剤(ピルトリシド)を投与することにより駆虫が可能であることから、早期の診断は重要で、飼育犬が野ネズミを捕食した可能性がある場合には検査の実施が必要となります。

本稿では人獣共通感染症、One World, One Healthの概念、One Healthフロンティア卓越大学院、One Health Research Center (OHRC) の活動につきまして御紹介させて頂きました。同窓会の皆様方にはこれからもご指導を賜りますようお願い申し上げます。

# 医学部生の研究活動紹介

医学科4年  
くろだ か のん  
**黒田 花音**  
(第101期)



私が、腫瘍病理学教室で勉強させて頂くきっかけとなったのは「おはようロビンス!」という勉強会でした。当初はコーヒーとパンを目当てに通っていただけでしたが、現在ではほぼ毎日顕微鏡を覗くようになってしまいました。他にも多くの学生が通っている中大変恐縮ですが、腫瘍病理学教室でい

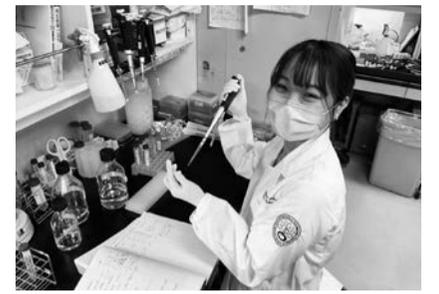
かに楽しく勉強しているかをお伝えできればと思います。

教室には実験を行う学生も多く出入りする中、私は手術検体の切り出しや、標本の観察を主に行っています。切り出し時に臨床経過や肉眼所見から病態を考えたり、どの断面を標本にするかを考えたりすることも大変面白いのですが、標本の観察において「分子生物学的に説明づけられた現象を細胞や組織の形態が反映している」ことに特に惹かれました。毎症例、勉強しなければいけないことが山ほどありますが、

見えたものから何が起きているのかを解釈する難しさと楽しさが勉強を続けるモチベーションになっています。

日々の切り出し、標本の観察の他、4年次4月には第111回日本病理学会総会・学生セッションにおいてポスター発表も経験させていただきました。初めてのことがばかりで右往左往していましたが、先生方の手厚いご指導のもと、優秀演題賞を受賞することができました。この他にも剖検、CPC、症例検討会の見学など貴重な学習の機会をいただいております。感謝してもしきれません。今

後も多くのことを学び取って行きたいと思っています。



医学科5年  
こん どう たかし  
**近藤 隆**  
(第100期)



医学部5年、100期の近藤隆と申します。病原微生物学教室の福原先生のもとでSARS-CoV-2の研究を行っております。

研究室の門を叩いたのは4年生の10月頃でした。ちょうどその頃ポリクリが始まり実習の規定により部活に行けなくなり、何か他に没頭できるものがないかという思いで研究を始めました。

これを書いている今、研究室に入ってからちょうど一年が経とうとしています。振り返ってみると、当初の想像以上ののめりこんでいます。

先生との帰り道、ディスカッションが盛り上がり、寒さを忘れて傍らの雪をキャンパスに延々と議論を続けた時。

早く結果を知りたくて眠い目をこすりながら実験を続け、誰もいなくなったラボで一人予想外のデータに直面した時。

論文を読みながらふと思いついたアイデアをホワイトボードに書きなぐり

ながら後輩に披露している時。

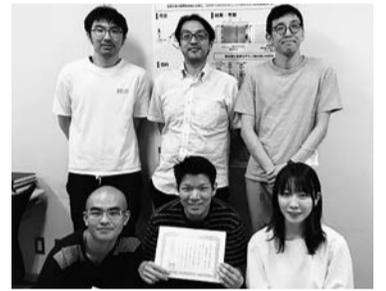
こういったとき、ああ、これがしくて大学に来たんだ、と思う。そんな瞬間がこの一年で数多くありました。

基礎研究は厳しい道だ、との声は多く聞きます。それでもこの道を志す人が多いのは、こういった一瞬が忘れられないと思うからなのでしょう。

実験の結果が想定と全く違う時など、自然の複雑さの一端を感じ取ることができます。現実の圧倒的な複雑さを前に膨大な知識を積み上げていった先人たちも、こうした一瞬を感じていたの

でしょうか。

何かに没頭したい人にとっては、研究を始めるというのは一つの魅力的な選択肢であると思います。ぜひ一緒に研究しましょう。



医学科5年  
しん たま え  
**秦 玉瑩**  
(第100期)



「皮膚科学教室での出会い」

四年生になり、コロナ渦で部活ができない中、残りの学生生活で何か新しいことができないかと考えた際に、研究室で実験に携わることがいい経験になるのではないかと考えました。三年

生最後の基礎配属で基礎の研究室で1ヶ月の研究生活を過ごす中で、臨床の教室で行われている研究に興味を湧き、皮膚科学教室に通うようになりました。

皮膚科学教室では実験の基礎や論理的な考え方だけでなく、それぞれの分野でのホットな話題を含めた最先端の研究について勉強することができ、また普段の生活や授業では出会えない知識や物事に触れることができるので、大変有意義な学生生活を過ごすことが

できます。皮膚科の先生方から丁寧な指導をしていただきながら、テストやCBTなどの忙しいときには実験を一旦お休みしてテストに専念することができたので、とてもびびりと実験生活を行うことができました。

加えて、臨床現場の貴重な症例に出会い、学会などで発表する機会をいただくことができます。今年の夏は新潟で開催された皮膚科学会東部支部にて「表皮融解性魚鱗癬に生じたclear cell

acanthomaの1例」というテーマで発表させていただきました。わたしにとって現地で参加する初めての学会だったので、何もかもが新鮮で、目から鱗が出るような研究や症例について勉強することができ、とても充実した時間を過ごすことができました。

最後にここで皮膚科学教室でお世話になっている氏家教授をはじめとし、実験を指導していただいている宮内先生や椎谷先生に御礼申し上げます。

## 医学部医学科公認サークル紹介シリーズ

第10回

### 剣道部

医学科3年  
みうら けんたろう  
**三浦 健太郎**(第102期)

北海道大学医学部剣道部は、現在、医学部学生4名、保健学科学学生5名、薬学部学生2名の計11名が所属しています。全学の剣道部とともに活動しており、体育会の諸大会に加え、医療系大会（東医体、道医体、北医体）にも参加しています。医学部剣道部のみでの活動は無く、全学の剣道部と活動を共にしているため、医学部系の部活であるにもかかわらず、様々な学部・所属の剣友と剣を交えることができます。そして、多方面の分野にわたって、一生の友人を得ることができます。このことは他の医学系部活にはない魅力かもしれません。

今年度は医療系の大会は中止となりました。一方で、体育会の諸

大会に向けては、出場選手になるための争いがあるわけですが、剣道部全体では男女50名ほどになるので、その競争は熾烈を極めます。選手選考期間の緊張感は凄まじいもので、普段の仲の良さはどこへやら、といったところです。しかしこの競争は、部員一人一人の心と体を鍛え、実力と自信を与えます。結果として、今年度、全日本学生剣道選手権には男女4名の選手（うち2名は医学部剣道部兼任）が北海道代表選手として出場し、北海道学生剣道優勝大会では男子が準優勝、女子が第3位入賞となり、全日本学生剣道優勝大会への出場権を獲得しました。日頃の仲間との切磋琢磨がこの結果を生み出したといえます。

また、北大剣道部・医学部剣道部は指導者に恵まれています。様々な場面でご支援をいただくOB・OGの諸先輩方に加え、今年度から新師範に栄花直輝教士八段、名誉師範に藤井稔範士八段を迎え、日々ご指導を頂いております。このような全国的にも他にないような素晴らしい環境で稽古ができることに

感謝して、日々精進していきたいと思っています。次年度には医療系大会も復活することと思いますので、OB・OGの先生方には今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。



# 水泳部

医学科3年

主将 <sup>きしもと</sup>岸本 <sup>よしこ</sup>佳子(第102期)

北大医学部水泳部は現在34名(スイマー 30名、マネージャー 4名)の部員が所属しています。練習は週に2、3回、札幌市内のプールで行っています。

部員は経験者・初心者問わず在籍しているため、練習は泳力ごとにコースを分け、実力に合わせた練習をしています。練習中には、経験者の部員が初心者の部員に泳ぎや飛び込みを教えることもあり、部活の練習だけでタイムを何秒も縮める部員も少なくありません。

北大医学部水泳部の良さは、自由でのびのびとした雰囲気です。自分のペースで楽しみながら泳ぐ部員もいれば、練習以外にも自主練習を行なって生涯ベストのタイムを更新する部員もいま

す。また、部員は医学科・保健学科の学生が中心ですが、工学部や法学部、経済学部といった医療系学部以外の部員もあり、普段の授業・実習では関わることのない学部の人と交流できることも魅力です。

昨年8月には3年ぶりの東医体が開催され、多くの医学科の部員が選手として出場しました。新型コロナウイルスの影響により大会の中止が相次いでいたため、3年生以下の部員にとっては入部してから初めての大会となりました。結果は男子総合6位、個人では3種目で入賞、男子4×50mフリーリレーでは優勝するなど、各部員がベストを尽くし、良い成績を残すことができました。

今後は多くの大会やイベントが再開されることが予想されます。コロナ禍で大会やイベントをあまり経験できなかった部員が大半ではありますが、先輩方およびOB・OGの方々のお力添えをいただきながら、活気ある部活動となるよう邁進していきたいと思ひます。

最後になりますが、顧問の森本裕二先生(62期)、OB・OGの先生方、日頃より北大医学部水泳部の活動にご支援を賜り、誠にありがとうございます。今後とも変わらぬご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。



## 理事会・評議員会報告

○日時 令和4年11月24日(木) 18:30～19:00

○場所 医学部百年記念館 大会議室

### 【理事会】、【評議員会】

理事12名、監事1名、評議員52名(出席者10名、委任状提出42名)

会議に先立ち、本日の理事会・評議員会は、長時間に亘る会議を避けるなど新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、合同で開催することが提案され、これが了承された。

### ○議事

#### 【協議事項】

1. 令和3年度会計収支決算(案)について

会計収支決算状況、特別会計預金状況及び各期別会費納入状況について説明後、審議の結果、これが了承された。

2. 令和3年度会計監査について

会計監査結果について説明後、審議の結果、これが了承された。

3. (その他)

(1)医学部百年記念館の維持経費支援について

浅香会長から百年記念館は木造建築であるため、定期的な外壁木造部分の保護塗装工事が必要でその維持費の一部負担について説明があり、審議の結果、これが了承された。

### 【報告事項】

1. 評議員、予備評議員の一部交代について 令和4、5年度の2年間を任期とする評議員、予備評議員の一部交代について報告されました。

2. 令和4年度庶務、事業報告について 庶務報告として、今年度の定時総会及び第99期生卒業歓迎会については、新型コロナウイルスの影響により卒業生歓迎会は中止して、定時総会を来年2月6日(月)医学部百年記念館で開催することが報告されました。

事業報告として、同窓会新聞の発行状況、同窓会員名簿の刊行及び表紙のデザインなどについて報告されました。

3. 令和4年度会計収支中間報告について

9月末日現在の会計収支状況について報告されました。

4. 令和5年度以降の会費免除について 会則第6条第2項に基づき、昭和42年卒業の第43期生の会員は令和5年度以降の会費が免除となることが報告されました。

5. (その他)

(1)北海道大学校友会エルム学部等同窓会加入促進支援金について

大場理事から、北海道大学に入学する際、校友会エルムに入会した学生が卒業後学部等同窓会への入会率が低いため、学部同窓会への加入促進を図る目的で設置され、医学部同窓会は来年2月から申請する旨報告されました。

## 総会、新入会員歓迎会のお知らせ

### 同窓会総会

令和4年度定時総会を下記により開催しますので、ご出席くださるようご案内いたします。

日時：令和5年2月6日(月) 午後6時30分より

会場：北海道大学医学部百年記念館 (1階)大会議室  
所在地：札幌市北区北15条西7丁目 (北大構内)

### 議事

1. 協議事項(予定)  
(1)令和3年度会計収支決算

(2)令和3年度会計監査  
(3)その他

2. 報告事項(予定)

(1)庶務・事業報告  
(2)令和4年度会計収支中間報告  
(3)その他

総会終了後、令和4年度フラテ研究奨励賞授賞式を予定しています。

**卒業生歓迎会は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止いたします。**

## 告知板

### <教授就任挨拶>



旭川医科大学外科学講座肝胆膵・移植外科学分野 教授

<sup>よこお</sup>横尾 <sup>ひびき</sup>英樹(68期)

2022年11月1日付けで旭川医科大学外科学講座肝胆膵・移植外科学分野教授を拝命いたしました。1992年に北大を卒業後、北大第一外科に入局、関連病院、大学病院勤務を経て2002年より旧国立がんセンター研究所で肝臓プロテオミクスの研究に従事しました。その後、大学に戻り肝胆膵グループで14年過ごし、2019年より旭川医科大学に赴任し臨床、研究、教育に従事してまいりました。地域、世界の肝胆膵外科学の発展に貢献できるよう諸先生方の力を借りながら精一杯努力していく所存です。皆様にはさらなるご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

### <学内・院内人事異動>

#### <採用>

2022年 9月1日 鈴木 崇祥(84期) 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 特任助教  
10月1日 打浪 有可(88期) 麻酔科 助教  
竹崎俊一郎(会員2) 小児科 特任助教  
11月1日 山田 崇弘(71期) 臨床遺伝子診療部 教授

#### <割愛>

2022年8月31日 樋田 泰浩(67期) 地域医療連携福祉センター 准教授 (藤田医科大学医学部先端ロボット・内視鏡手術学講座教授)

#### <その他>

2022年12月1日 乃村 俊史(78期) 皮膚科学教室 客員教授 (筑波大学医学医療系皮膚科教授)

＜令和4年度 北大医学部 東京フラテ会総会のご案内＞

令和4年度の東京フラテ会総会は新型コロナウイルス感染等の諸事情から、学士会館の会場に加え、Zoomでのライブ配信を行うハイブリッド開催とします。さらに講演会・総会のみで、懇親会は行わない予定です。変則開催でご迷惑をおかけいたしますが、同期知友をお誘いあわせの上、ご参加くださいますようお願い申し上げます。

日時：令和5年3月11日（土）午後5時受付開始  
会場：学士会館 2階（地下鉄 神保町駅 A-9出口 1分）  
東京都千代田区神田錦町3-28 Tel 03-3292-5936



会費：12,000円（現地参加者のみ）  
講演会：午後5時30分から6時30分 203号室  
＜講師：慶應義塾大学医学部・腫瘍センター 西原 広史教授（71期）＞  
「がんゲノム医療の光と陰 ～何がわかり、何ができるのか～」

議事：午後6時30分から6時45分 203号室  
＊上記講演会・総会議事はZoomにてライブ配信いたします。

参加方法：左記のQRコードから、東京フラテ会参加専用フォームにて参加申し込みをお願いします。会場参加希望の有無も記載ください。ご不明な点があれば下記までお問い合わせください。

東京フラテ会 会長 畠山 昌則（57期）

【お問い合わせ】事務局 武蔵村山病院 鹿取 正道（67期）  
Tel 042-566-3111（代） e-mail mkatori@yamatokai.or.jp

## 事務局からお知らせ

### ご寄付のお願い

同窓会では、企業、団体、個人の皆様に、同窓会事業支援のためのご寄付をお願いしております。

寄付者のご了承を得て同窓会新聞にご紹介し、10万円以上のご寄付には、楯または額による感謝状を贈呈させていただきます。

いただきます。  
ご寄付につきましては、同窓会事務局にご連絡ください。  
電話：011-706-5007  
E-mail：furate@med.hokudai.ac.jp

### 会員名簿の処分にお困りの方へ

会員名簿には個人情報に掲載されていますので、ご不要になった名簿は適切な処分をお願いいたします。ご自身で処分が困難な方は、郵便（レターパック等）により同窓会事務局へ送ってください。なお、恐縮ですが送料は各自

でご負担願います。  
○送付先  
〒060-8638  
札幌市北区北15条西7丁目  
北大医学部百年記念館  
北海道大学医学部同窓会事務局

## 同窓会費について

#### ○会費納入のお願い

会員の皆様には、会費納入にご協力いただきありがとうございます。  
同窓会の事業は会員の皆様の会費によって運営されています。今後も意義ある同窓会活動を継続していくために、会費納入にご理解とご協力をお願い申し上げます。

#### ○会費納入は次のいずれかの方法によります

①口座振替、②コンビニ納入、③銀行振込  
※詳しくは同窓会新聞に同封される払込票をご覧ください。

#### ○会費未納者と刊行物の送付

・過年度分未納会費が2年を超える会

員には、会員名簿（同窓会誌）をお送りしません。  
・納入が9月30日を過ぎると、入金確認及び印刷部数確定の都合によりお送りすることができません。

#### ○会費免除者と刊行物の送付

・会則により、卒業後55年を経過した

会員の会費は、翌年度から免除となります。  
・42期生は令和4年度から、43期生は令和5年度の会費から免除となりますが、免除前に過年度分2年を超える未納会費があると、会員名簿（同窓会誌）をお送りしません。

## ドクター総合補償制度のご案内

同窓会では「ドクター総合補償制度」を創設し、現在、500名近い会員が加入して、ご好評をいただいています。  
本制度には「医師賠償責任保険（勤務医向け）」、「医療・がん保険」、「所得補償保険」があり、団体割引が適用さ

れるので割安な保険料で加入することができます。  
年度途中でも加入出来ますので、同窓会事務局あるいは取扱代理店にお問い合わせください。

〈同窓会事務局〉  
電話：011-706-5007  
E-mail：furate@med.hokudai.ac.jp  
〈取扱代理店〉  
株式会社第一成和事務所  
〒103-8214 東京都中央区日本橋

久松町11-6 日本橋TSビル8F  
フリーダイヤル：0120-100-492  
E-mail：koumu@d-seiwa.co.jp



## フラテ109号発行のお知らせ

医学部フラテ編集部

同窓会新聞をご覧の皆様、いつも学友会誌フラテをご購読いただき、誠にありがとうございます。皆様の温かいご支援を賜り、今春に「フラテ108号」を無事発刊することができました。

さて、我々フラテ編集部では、来年3月発行予定の「フラテ109号」の発行準備を進めております。本号では、渥美達也先生の北海道大学病院院長就任インタビューの掲載や、北海道医師会への取材記事などを予定しております。COVID-19感染拡大の中で我々も活動が制限されておりますが、オンライン化が進んだ今だからこそ出来ることを探しました。100号

以上続く学友会誌として、これまで通り先生方のご活躍をお届けしながら、新しい時代へ変化していく様子を後世に伝えられればと思います。

我々フラテ編集部は、「北大同窓生の茶の間」であるべく、本号もほっと一息ついていただける温かい記事を多数ご用意しております。近年は比較的若い先生方からのご購読が減少傾向にあります。もし、この文章で少しでも興味を持って頂けた先生がいらっしゃいましたら、是非ご購読下されば幸いです。

ご購入をご希望の方は、同封の払込用紙またはQRコードからお支払いをお願い致します。電話でのお申し込みは受け付けておりません。ご了承ください。

すでに108号巻末の用紙で申し込まれた方は今回申し込む必要はございません。

#### 109号の主な内容（予定）

- ・渥美先生北大病院院長 就任記念インタビュー
- ・北海道の医療のこれから
- ・教室日より、各教室の勉強会、説明会一覧
- ・新任教授インタビュー
- ・みどりのベンチ（医療界で活躍する女性へのインタビュー）
- ・茶苑



#### フラテ茶苑 寄稿者募集

フラテ茶苑では、卒業後の先生方からのご寄稿文を掲載しております。期を問わず、ご自身の専門分野、趣味等

をご投稿いただけます。多くの学生が読んでおり、北大出身の先生方の多彩な分野での活躍は学生にとって視野を広げる格好の機会となっております。

様々なバックグラウンドを持つ先生方がフラテ茶苑を通して交流できる、そんなコーナーにしていけたらと思います。今年度も沢山のご寄稿をお待ちしております。

○内容・形式・字数：自由（専門分野のお話、趣味のお話、最近取り組んでいる事など）

フラテ編集部  
E-mail:frate.med@gmail.com  
〒060-8638  
札幌市北区北15条西7丁目  
北海道大学医学部内

## フラテ祭2022 開催報告

フラテ祭実行委員会事務局

9月24日（土）に第15回目となる「フラテ祭2022」は北海道大学ホームカミングデーと同日にオンラインにて開催いたしました。同窓生をはじめとする関係者の皆様方、82名が視聴されました。

田中伸哉フラテ祭実行委員長並びに浅香正博同窓会長からのご挨拶に続き、畠山鎮次医学部長、渥美達也北海道大学病院院長による講演が行われた後、医学部公認団体3団体（東洋医学研究会、

IFMSA北大、アンサンブル・フラテ）による活動発表が行われ、医学部の現状を発信しました。

続いて、学内外でご活躍されている同窓生による特別講演が行われました。

白土博樹氏（本学医学研究院医理工学グローバルセンター教授／医学部第57期）から「がんの放射線治療—北大から世界へ—」と題した講演が行われ、上山博康氏（札幌禎心会病院脳疾患研

研究所長／医学部第49期)から「“医士道”を旨として!」と題した講演が行われ、盛会のうちに終了いたしました。今年度も多くの方のご支援とご協力をいただき、無事にフラテ祭を終えることができましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。



白土博樹氏による特別講演の様子



上山博康氏による特別講演の様子

## 新刊書紹介



### 「がん予防の教科書」

あさか まさひろ  
浅香 正博(48期)  
潮出版社 ¥1,650

北海道医療大学学長である浅香正博氏の最新書です。浅香氏は北大消化器内科教授時代に、医学誌の連載をまとめた最初の一般向け著書「私のアラビアンナイト 不思議の国の文化と医療事情」を出版した後、「胃の病気とピロリ菌一胃がんを防ぐために」、「胃がんでいのちを落とさないために」、「胃がんはピロリ菌除菌でなくせる」など多くの一般向け著書を出してきました。胃がんの発症や死亡を防ぐためには、一次予防であるピロリ除菌が非常に重要

であることを読者に訴えて来ました。それは浅香氏のわが国から胃がん死亡者や罹患者をなくしたいとの強い信念からです。その源は世界で初めてピロリ除菌によって胃癌発症が抑制されることを臨床試験で証明したことにあります。本書は感染症が原因である胃がん、肝臓がん、子宮頸がんに留まらず、肺がん、大腸がん、膵臓がん、乳がん、前立腺がんについての発生メカニズムと予防法について、簡易な文章で簡潔にまとめられています。浅香氏は消化

器内科教授の定年後、北大医学部にがん予防内科講座を創設して、臨床医学の観点からがん予防を研究してきました。本書はその成果をまとめあげたものです。本人は本書を最後にしたいと話していましたが、まだまだがん予防についての啓発を続けてほしいと願っています。なぜなら、わが国のピロリ菌感染者は人口の36% 4500万人いると推測され、まだその半分しか除菌されていないのです。

(58期 加藤元嗣)



### 「精神科長期入院(ロングステイ)よさようなら」

なかむら みつる  
中村 充(56期)  
金剛出版 ¥3,520

同期の中村充医師による表記題名の書籍が発刊された。日本の精神科病床数は国際的にも格段に多いといわれ、公立精神科病院は長期入院患者の地域移行が喫緊の課題となっている。そうは言うものの、数十年にわたる入院患者に退院していただくことは、素人目に見ても容易なことではなく、数多くの困難が横たわっていることは想像に難くない。著者は基礎研究者を経て精神科に転身した医師であるが、要因を丁寧に分析し、患者にあった斬新なア

イデアを粘り強く実行し、退院にこぎつけている。著者の説くところの治療同盟という、病気に対する一致団結したチーム医療の成果でもある。個人が特定されない症例報告の19例ほどが丁寧に解説され、楽しいイラストつきで、門外漢にとっても読みやすい。

さわりを紹介する。「退院意欲は伝染(転移)する。症例8、少しでも意欲をもって患者さんをまず一人見つけて、退院の実績を積むところから始めれば、必ず変わるはずである。」統合失調症の

患者さんが42年の入院に終止符を打つことができた症例報告である。その他、暴言や問題行動を持つ患者、無為自閉状態にある患者なども、退院に至っている。最も必要な精神療法は退院支援にあり、患者さんが社会性を取り戻すことが大切と著者は訴える。関心のある医師は一読の価値があり、時宜を得た書といえる。尚、奥様も同期であり、助言や原稿校正にかかわったとのこと。内助の功も含めて共著者である。

(56期 山下純正)



### 「安全に施行するためのESDテクニック」

みやざわ みつ お おおにし しゅんぺい  
宮澤 光男(61期)、大西 俊介(70期) 編集  
医学書院 ¥9,350

早期胃がんに対する内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)が日本で開発されて20年以上が経過した。この手技が確立されていく中で、ESDは食道、大腸、十二指腸の順に保険収載され広く普及している。より難易度の高い病変でも切除可能となる一方で、出血や穿孔、狭窄などの偶発症対策は重要な課題となっている。

本書は、再生医療の立場からESD偶発症の治療法研究開発を行なっている宮澤光男先生と大西俊介先生が編集・

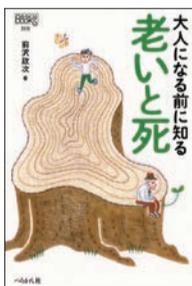
企画し、北海道大学病院でESDの実践と研究を担う大野正芳先生(83期)が中心となって全国の各方面のエキスパートの先生に執筆を依頼し実現した書籍である。

「総論」では、周術期管理や偶発症への対応、抗血栓薬の取り扱い、高周波手術装置の設定、ESD後の狭窄予防などについて解説されており、ESDにおいて欠く事のできない知識や考え方を知ることができる。「臓器別各論」と「ESDに役立つ知識」では手技の実際が解説されている。臓器別の標準的治療

と困難例、視野の確保や局注の注意点、トラクションデバイスの使い方や穿孔時の対応など実践に役立つ内容がわかりやすく説明されている。しかも多くの動画がWeb掲載されており供覧できる。従来の書籍では伝わりにくかったポイントがリアリティーを持って学ぶことができる。

本書は、ESDの20年の歩みと今が収載されている。是非座右に置いていただき、適宜参照していただければと思う。

(63期 和田亮一)



### 「大人になる前に知る 老いと死」

まえざわ まさし  
前沢 政次(会員2)  
ペリカン社 ¥1,760

これから人生を切り拓いていく若者たちに向けて書かれた本です。

認知症について、老いについて、高齢者と地域社会との繋がりについて、死について、そして、そこから照射される生について、たいへん優しい語り口で、具体的な物語を交えつつわかりやすく書かれています。

現在、夕張市で一臨床医として今なお現場で泥臭く働いておられる前沢先生が本書を書かれた背景には、コロナ禍が社会に及ぼしている状況に背中を押されて、ということもあったのでしよ

う。本文の合間に挟まれているコラムの中には、夕張市におけるコロナ禍による具体的影響を何点が記しつつ、「高齢者の外出を制限すると、体のみならず心の健康度の低下が多く見られます。孤独死も2例経験しました」と書かれています。

「おわりに」の言葉の抜粋です。「人生は出会った教師や友人によって大きく左右されると思います。それは顔と顔を合わせる出会いばかりでなく、本や音楽などの文化を通しての出会いもあると思います。(中略) 外来診療や学

校医の仕事を通して、中高生のみなさんが、思春期という心身の変化の大きな時期、またコロナ禍で生活が不安定になりやすいことを知りました。これからはみなさんにメッセージを送り続けたいという気持ちになりました。中高生のみなさんが『老いと死』を知ることによって、毎日の生活が充実したものとなりますようにお祈りいたしております。」

前沢先生の優しさに溢れた一冊です。

(76期 岡本拓也)

次号に新刊書紹介をご希望の方は、右記の要領でお送りくださいますよう、お願いいたします。

【原稿締切日】 2023年3月15日(水)までにお送りください。

【字 数】 本文600字以内でお願いいたします。※本文の前に「タイトル」、著者名(または編集者・監修者名等)フリガナ(卒業期)、出版社名、金額(税込)を、最後に執筆者名および卒業期を明記してください。

【表 紙】 表紙の画像をメールに添付してお送りください。

【書評執筆者】 著者(編集者・訳者・監修者)以外の同窓会員(会員2も含む)に限ります。

【原稿送付先】 furate@med.hokudai.ac.jp

【掲 載 号】 新聞175号(5月号、6月上旬頃発送開始予定)

# 北海道医学会からお知らせ

## ○北海道医学会について

北海道医学会は北海道における医学と医療の進展を図るため、大正12年に発足した学術団体です。現在は、北海道大学、札幌医科大学、旭川医科大学の医師、医学研究者のほか本会の目的に賛同される方々を一般会員として、また道内の主要医療機関には特別会員として、本会に功績のあった方々には名誉会員としてご参加いただいております。

## ○主な活動内容

- ・機関誌「北海道医学雑誌」の発行 (5月、11月：令和3年は第96巻)
- ・学術集会「市民公開シンポジウム」の開催 (10月下旬：昭和42年から実施)

・若手研究者への「研究奨励賞」の授与 (年3名以内に賞状及び副賞：昭和58年から実施)

※ 北海道医学雑誌は大正12年8月の創刊以来、戦中、戦後の一時期を除いて今日に至るまで継続して刊行され、北海道における医学総合雑誌として広く認知されています。

本誌は原著論文、学位論文以外にも、「研究会」「教室だより」などのセクションにおいて会員の様々な活動を紹介しています。

## ○会員の状況 (令和3年12月31日現在)

- ・一般会員 579名 (年会費 4,000円)
- ・学生会員 7名 (年会費 1,000円)
- ・特別会員73団体 (年会費 25,000円)
- ・名誉会員 158名

## ○入会のご案内

本会に入会されていない同窓会員におかれましては、是非ご入会いただきますようご案内申し上げます。医療機関としてのご入会も歓迎します。

なお、会員には機関誌「北海道医学雑誌」を発行の都度お届けいたします。

入会方法は、北海道医学会事務局にお問い合わせください。

・投稿規定、掲載料等は、北海道医学会事務局にお問い合わせください。

## ○お問い合わせ先

北海道医学会事務局

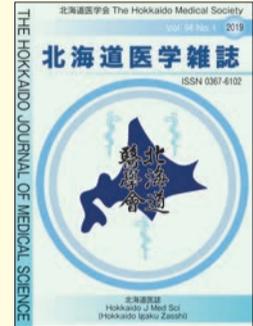
電話：011-706-5007

E-mail: digakkai@med.hokudai.ac.jp

## ○会費納入について

北海道医学会では、従来の①郵便払込、②銀行振込に加え、③クレジットカードでの会費納入が可能になりました。ご利用方法については、本会ウェブサイトをご覧ください。

<https://www.hokkaido-med-society.org/>



## 過年度会費が2年を超える 会費未納者と会員名簿の発送について

2014年度より、過年度分未納会費が2年を超える会費未納者には、会員名簿および同窓会誌の送付を停止することになっております。

新聞172号および前号にも記載いたしましたが、**過年度会費が2年を超える会員で、本年度の会員名簿の送付を希望される方は、2022年9月30日迄に未納会費の納付をお願いしております。**

つきましては、すでに印刷部数確定のため、**期日以降に会費を完納されましても、今年度の名簿を発送することは出来ませんので、ご了承ください。**

### ●ご注意ください

#### 【令和4年度会員名簿について】

2022年9月30日を納付期限としております。たとえ年度以内(2023年3月31日まで)に未納額を納付いただきましたも、当年度発行の名簿をお届けすることはできません。

#### 【過年度分の名簿および会誌について】

後日、滞納分を納付されましても、個別発送はいたしません。

## 令和4年度 同窓会員名簿について

新聞172号および前号でお知らせいたしました通り、「**会員登録情報変更届**」は、**令和4年10月5日(水)事務局必着分を持ちまして締切**とさせていただきます。

なお、期日以降の届出につきましては、可能な限り対応いたしました。届出をしたにもかかわらず変更されていない場合は、印刷に支障をきたすため、間に合わなかった可能性がございます。申し訳ございませんが、ご了承くださいませよう、お願い申し上げます。

## 百年記念館の利用について

北海道大学医学部百年記念館は、原則北海道大学医学部及び関係部局が主催する授業及び行事、また、同窓生の交流の場としてご利用いただけます。なお、事前予約が必要のため、ご利用希望の際は下記問合せ先までご連絡願います。

## お問い合わせ先

北海道大学医学系事務部総務課庶務担当

TEL: 011-706-5004 FAX:011-717-5286

E-mail: shomu@med.hokudai.ac.jp

【受付時間】月曜日～金曜日(年末年始・祝日を除く)午前10時15分から午後5時まで

## 一面の写真説明

### 【AM 8:39】

医学科3年 西村 峻(第102期)

布団を出る。シャワーに入る。歯を磨きながら髪を乾かす。服を着る。リュックを背負って玄関を出る。息は

白い。電車に乗る。北12条駅。小走りで信号を渡る。1限間に合うかな。

あ。枝に乗っていた白が、目の前を揺られて気付く。

「昨日は相当降ったんだね。」厳しい寒さの中に、一瞬の安らぎ。そんな、ちょっとお気に入りの通学路。

## 編集後記

2005年に卒業して17年の年月が経ちましたが、編集委員としてこの同窓会新聞に関わるのができ光栄に思っております。現在は法医学教室で日々実務と研究に励んでおりますが、新型コロナウイルス感染症の第8波を北海道が迎えていることを肌で感じており、

いつまで続くのか先行きが見通せない状況です。職場などでも感染の知らせが多くなり身近に感じている次第ですが、同窓会の先生方と共にこの危機を乗り越えていきたいと思っております。

(81期 的場光太郎)

## ご逝去者 新聞173号発行以降、ご連絡いただいた方を掲載しております。

御逝去年月日	氏名	期	御逝去年月日	氏名	期
2021年			9月10日	浅倉 悟	29
1月21日	三村 信輔	47	9月12日	重住 道彦	30
4月16日	外館 晃洋	68	9月25日	宮岸 勉	36
9月10日	更科 三郎	51	10月6日	佐々木 志郎	40
12月31日	米村 尚晃	38	10月7日	井村 卓	55
2022年			10月9日	金山 清志	38
4月26日	久次米 城司	71	10月9日	山根 繁	38
6月30日	岩川 幸昌	27	10月10日	牧田 憲太郎	35
7月7日	上田 満	36	10月18日	河口 道夫	37
7月12日	高島 巖	30	10月23日	小林 邦彦	42
7月20日	入江 満	専5	10月24日	渡辺 末太郎	31
7月22日	富樫 一夫	50	10月24日	菅野 盛夫	38
8月16日	佐藤 祐道	27	11月10日	山田 功稔	24
8月20日	矢島 千穂	40	11月14日	稲川 稔	専7旧
8月23日	小川 誠	専6旧	11月18日	朝倉 茂生	37
8月27日	佐藤 直樹	51	12月2日	千葉 等	51
8月28日	下澤 英二	49	12月4日	中 馱 邦博	60
8月29日	石川 登喜治	41	12月9日	中 村 隆俊	専7新
9月3日	佐藤 琢司	32	12月13日	藤 田 正文	30

○同窓会新聞は142号からHP上でご覧いただけます。アドレスは次の通りです。

<https://hokudai-med-dousou.com/news/index.htm>

○会員登録情報の変更は、ホームページ内の「会員データ登録・変更フォーム」より、お手続きいただくことが可能です。

<https://hokudai-med-dousou.com/contact/>

印刷所 **大日本印刷(株)**

〒065-0007 札幌市東区北7条東11丁目1番1号  
代表 (011) 750-2205